

〈研究ノート〉

『キリスト元型』における「受胎告知」
と心理療法をめぐって

山 愛 美

『人間文化研究 第17号』（2006）において、キリストの生についてユング心理学の立場から論じた Edinger, E. F 著の『The Christian Archetype キリスト元型』（1987）を紹介し、心理療法と結びつけて考察を試みた。Edingerは著書の中で、キリストの一章を描いたキリスト神話から、次のような14のイメージを取り上げている。

1. 受胎告知
2. 降誕
3. エジプトへの逃亡
4. 洗礼
5. 凱旋入場
6. 最後の晚餐
7. ゲッセマネ
8. 連行と裁判
9. 鞭打ちと嘲り
10. 磔
11. 悲嘆と埋葬
12. 復活と昇天
13. 五旬節(聖霊降誕祭)
14. 聖母被昇天とマリアの戴冠

本稿では第1の「受胎告知」を取り上げて、心理療法とのかかわりについて、次のような点から考察を試みる。1. 垂直次元に開かれる体験としての「受胎告知」、2. 「受胎告知」と心理療法—錬金術の視点から—、3. マリアとイヴを比較して

1. 垂直次元に開かれる体験としての「受胎告知」

(1) 受胎告知

有名な「受胎告知」の場面は、新約聖書の『ルカによる福音書1:26-38』に描かれている。

六ヶ月目に天使ガブリエルは、神から遣わされて、ナザレというガリラヤの町の、ダビデ家のヨゼフという人の許婚である乙女のもとに来了。その乙女の名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられます」。マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいたのですよ。あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子といわれるでしょう。神である主は、彼に父ダビデの王座をお与えになる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがないでしょう」。マリアは天使に言った。どうしてそのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたをおおうでしょう。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれるでしょう。あなたの親類のエリザベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっています。不妊の女といわれていたのに、もう六ヶ月になっています。神にできないことは何一つありません」。マリアは言った。「私は主の婢です。お言葉どおり、この身に成りますように」。そこで天使は去っていった。

ヨーロッパの美術館を訪れると、必ずといってよいほどこの「受胎告知」の場面を描いた絵画を目にする。キリスト教や聖書に特に詳しくない者であっても、このような絵画を前にすると、我々が普段生活している日常とは次元の異なる世界の存在を感じさせられる。降下し告知するものとして描かれているのは、その都度天使であったり鳩であったりするが、いずれにせよ天上界から降りてくる使者は、上方から下方へという垂直方向のベクトルを示す。天使あるいは鳩によって天と地はつながり、地上の者は垂直次元に開かれる。

マリアにとってこれは圧倒的な体験であり、「私は主の婢です。お言葉どおり、この身になりますように」と、信頼と喜びをもってこの知らせを受け入れる。ヌミノースなものとの出会いである。Edinger (1987)は、この場面に自己と自我の遭遇を重ねて見ており、「自我が自己の下に置かれ、奴隷のように感じられることになる」と述べている。

絵画から視覚を通して受けるインパクトは、直接的で強烈である。このようなイメージは心に深く浸透し、天上の世界の存在とともに、我々人間にとってひれ伏すしかない圧倒的な絶対者の存在を、知らず知らずのうち心の中に植えつけてきたのではないだろうか。

(2) 「降って湧いたような災難」

日本語に「降って湧いたような災難」という表現がある。自然災害や本人にとって防ぎようがなかったと思われる災難に会った時、我々はこのように言う。これは、日常の人知ではいかんともしがたい出来事であり、それを突然予期せず上方から降って来た何かに喩えている。この表現にも垂直方向の動きが見られる。

古来より、人々はこのような災難に対して、その責任を特定の個人や具体的な状況に帰そうとするのではなく、日常とは異なる次元の力の働きを暗に想定することで、受け入れて来たように思われる。このような発想は、我々人間の力を超えた存在を認めるものであると同時に、生じた災難に対する悲しみや怒りを収め、鎮めるための装置としての役割も持つといえよう。

もちろん、垂直次元の延長に天上界が開け、そこに絶対的な神が存在するキリスト教の世界観と、上述したような日本語の言い回しに見られるそれとを同一線上に論ずることは出来ないが、少なくとも自分のいる世界が日常の世界だけで完結していないという点においては共通している。つまり、個人が依拠する世界観が水平次元のみを視野に入れて構築されているのか、垂直次元にも開かれているのか、という違いは決定的である。

垂直次元に開かれる究極の体験としては、神の顕現や啓示などの宗教的な体験がある。しかし、偶然に非日常的な世界を垣間見、これまで当然だと疑ってもみなかったことがそうではなかったと気づくというテーマは、小説や児童文学、おとぎ話の中にも多く見られる。そして我々の人生においても、確かにそのような経験はある。我々人間が、日常の水平次元から垂直次元に開かれると、それまで絶対化されていた価値観も相対化される。

しかし一方で垂直次元に開かれるということは、自我の力がしっかりしていないと無意識の中に呑み込まれてしまい、精神病の発病の危険性もあるということを知っていなければならない。

(3) 開かれた垂直次元について

我々にとって、垂直次元に開かれ、それが自らの世界観の中にどのような組み入れられるかは重要な課題である。

Aさんは「親しい人と喋っている時、一音が脱落して言葉が時々不明瞭になる」と訴えられた。それは例えば、「ありがとうございます」と言うべきところが、「り」が抜け落ちて「あ・がとうございます」になるというものだった。「一音が脱落する」いうAさんの表現が印象的だった。ある時「普通のところ(場所はその都度異なるが、日常的な場所)を歩いていると、突然落とし穴があり、落ちた！と思うところで目が覚めた」という子どもの頃度々見た夢を思い出された。普通に喋っていて一音が脱落するのも、歩いていると突然落とし穴に落ちるのも、いずれも水平方向の動きの途中で突然垂直次元が開いて落ちるというもので、象徴的には同じ体験である。つまり下方への通路が予期せずして開くのである。Aさんは、他に困ることとして施錠やガスの元栓が少し気になることを挙げられたが、それ以外では特に問題は感じておらず、調子よくやれているということだった。施錠やガスの元栓へのこだわりは、「むこう」から「こちら」に何かが入り込んで来ることに対する不安であり、その通路がきちんと閉じられている

かが気になっているのである。

子どもの頃の夢からも分かるように、ここではずっと垂直次元にどのように開かれ、どのように関わっていくか、ということが重要なテーマになっていることが推測できる。このように、夢や日常の中で少し気になることの中にも、垂直次元との関わりが問題になっているテーマがみられる。

2. 「受胎告知」と心理療法—錬金術の視点から

(1) 心理療法の始まり

Edinger は「受胎告知」の章の冒頭で次のように述べている。

分析は、我々を捉えた体験、あるいは上(天)から降ってきたような体験を解き放つものでなければならない。そこで解き放たれる体験は、古代人に生じたような、実体と肉体を持つ体験である。

心理療法の始まりはさまざまである。クライアントは、我々心理療法家のもとに、症状や問題と呼ばれるものを携えて来談される。このような症状や問題が生じてくること、それが上述の「我々を捉えた体験」、「上(天)から降ってきたような体験」である。

ところで、症状や問題とは何か。例えば体の病気においても、漠然と「体の調子が悪い」というだけではどうにもならない。「どのように調子が悪いのか」が具体的に把握されることが必要である。例えば痛みがあるのなら「どのように痛むのか?」「どのくらい痛むのか?」「いつから痛んでいるのか」など。まずは体の不調には痛みがあると特定され、さらに症状について具体化されていく。「実は熱もある」、「吐き気もある」、「頭痛もある」と、漠然と捉えられていた体の調子の悪さは、さらに具体的に語られ、生じている問題の種類や場所、程度等が明確にされていく。このように自分の体に生じている症状を把握し、具体的なものとして語ることが出来るのは、意識する力、自我の働きによるものである。

体に生じる症状や問題に比べて、心に生じている症状や問題を把握し、言葉にするのはさらに難しい。心の中で生じている調子の悪さや違和感を意識し、具体的な症状や問題として語るのも自我の働きである。個に兼ね備わっているさまざまな条件や、個が置かれている状況に応じて症状や問題は形成される。形あるものになって初めて、それまで意識されていなかったもの、あるいはされていたとしてもただ何となく調子が悪いと捉えられていたものが、意識され、訴えることが可能になる。だからある意味では、具体的な症状や問題を形作り、示すことが出来るのはすべて自我の力であるとも言えよう。

長年漠然とした違和感のようなものを感じながらも、具体的にそれを掴み取ることが出来ず、「自分の人生を生きている感じがしない」と訴えたり、「自分のことをもっと知りたいので心理療法を受けてみたい」と明確な目的もないまま来談されたりすることがある。このような場合、自我の力が弱くて、症状や問題として具体化されていないということもあり得るので、注意が必要である。しかし、非常に深い問題と取り組んでいるがゆえに、具体的な訴えにはなりにくく、こうした表現をされる場合もある。このような場合は、心理療法家が細心の注意を払い、クライアントの現実的なことにエネルギーを注ぎながらも、深みへと開かれつつ会うという姿勢を保つことが出来れば、クライアントと心理療法家双方にとって非常に意味のある仕事が出来る場合もある。

(2) 凝固、溶解、結合そして受肉

ところで Jung は、錬金術の過程を、錬金術師によって内的に体験されたイメージの変容過程として捉え、心理療法において生じることと重ね合わせて研究を行った。そして、両者の過程において生じるイメージの展開する様に共通点を見出し、錬金術から得られた知見を援用しながら心理療法過程を読み解くことを試みた。さらに Edinger (1985) は、特に錬金術における作業という考え方に注目し、「凝固(固める)」「溶解(溶かす)」「結合

(つなぐ)」など幾つかの作業法を取り上げ、心理療法において心の中で起こる現象と関連付けながら論じた。上述したように、症状や問題として具体的なものにすることを、錬金術の作業では「凝固」と言う。

さて通常我々人間にとって、凝固物として把握された問題や症状は、当初あたかも外部から侵入してきた厄介な「異物」のように感じられ、取り除きたいということになる(図1)。「これさえなくなれば……何とか以前の私に戻りたい」と。

ところがマリアには、受胎告知と同時に懐胎が生じている。ここでは「異物」として捉えるのではなく、すでに胎内では受肉の作業が始まっているのである。

外部から「異物」が侵入してきた(と感じられている)体験。実はこの「異物」は外部から侵入してきたものではなく、自分の内部から生じてきたものであるのだが、我々にとってそのことを認めるのは決してたやすいことではない。まず、「異物」をとにかく取り入れ、いったん解き放つ。つまり錬金術の用語でいえば溶解することから始まる(図2)。

例えば、あるクライアントが「配属が変わってから、会社に行けなくなった、行かなくてはと思うのに行けない」と言われたとしよう。これは自我によって凝固された、一つの具体的な訴えである。それまでは特に問題なくやれていたならば、このクライアントにとってこの体験はまさしく厄介な「異物」である。大抵、何か原因があるはずだからそれを突き止めようということになる。そして、例えば「同僚の〇〇さんのものの言い方が気に入らない、あの人と喋るとイライラして調子が悪くなる……」ことに気づき、それが上記の訴えと結び付けられると、結局は「〇〇さんが、自分が会社に行けないことの原因だ」となってしまう。安直に具体的な

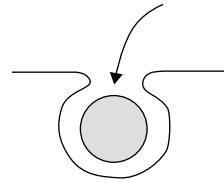


図1 「異物」が浸入

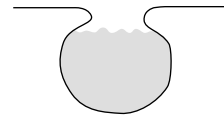


図2 「溶解」

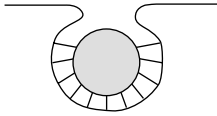


図3 「結合」しながら新たに「凝固」



図4 取りこまれて一体化

事象同士を短絡してしまうと、このようになりがちだ。そうになると、配置換えを願い出るか、とか、○ ○さんと顔を合わさないにはどうするか、といった実際的で操作的な解決法を見つけて、「異物」を取り除くことばかりにエネルギーが注がれてしまう。

心理療法においては、具体的なものとして固められたものを解きほぐしたり、短絡的に繋がれているものを緩めたりしていく作業が求められる。クライアントの中には「そういえば同じような体験を高校生の頃友達との間でしたことがある」と過去に戻ろうとする方もあれば、「父との関係と重なるところがある」と家族のことに思いを馳せる方もおられる。気が付けば当初の訴えはほとんど聞かれなくなり、自分自身の生きることの意味について取り組み始める方もおられる。ここまできると「異物」はすでに「異物」ではなくなり、自分の中に取り込まれ、そこで新しいつながり—錬金術の作業では結合—が生じる(図3)。このように、いったん凝固されたものが溶解され、以前とは異なる新しい形へと再び具体化、受肉化される。さらに心理療法においては、これは個の中に取り込まれ最終的には一体化する(図4)。

ところで、Edinger (1985)は「凝固されるべき物質は、移ろいやすい水銀である」と述べている。すでに固まっているものを、解き放つことなくさらに凝固するようなことをしては、何も、新しく生まれず、それだけの仕事しかできない。もちろん「移ろいやすい」ものを凝固するには多大なエネルギーを必要とする。どのようなものを、どのように凝固するかは、個のありようによるところが大きい。

3. マリアとイヴを比較して

(1) 受胎告知の暗い側面

Edinger (1987)は、上述の聖書から引用した受胎告知の場面(『ルカによ

る福音書』1:35)「聖霊があなたに宿り、いと高き方の力があなたをおおう」の「おおう」(日本聖書協会の訳による)という表現に注目している。これは原著では“overshadow”となっており、これには「影でおおう」、「暗くする」という意味もある。また Edinger は、「雲は外から見ると明るいのが、それに包まれると暗くなる」という点を指摘し、さらに正典の資料には詳述されていない幾つかの文献も取り上げながら、「いと高き方(=ヤハウェ)」の雲におおわれることの、暗い側面を読み取ることを試みている。

そしてさらに、「受胎告知の暗い側面は、姦婦が死罪となっていた時代に私生児を身ごもるという事実にある」とし、さらにこの暗い側面は、「受胎告知を人間の体験として捉える場合に、そのイメージを完成させる手助けとなる」と述べている。つまり、Edinger は一連のマリアの体験を、神的な体験と人間の体験の二つの視点から捉え、一つの出来事の中に二重の体験を読み取ることを試みているのが伺える。

(2) マリアとイヴ

Edinger は、アダムとイヴのエデンの園からの追放を、意図せずして受胎告知の横に並べ置いた絵が幾つかあるということから、マリアの神への従順とイヴの神への不従順とが対比されるという事実を指摘している。天使ガブリエルが蛇の代理人だとする説などを取り上げながら、二つのイメージの類似性を示すとともに、両者の対比と対立について以下のように述べている。

イヴが蛇の言葉に従うことと、マリアが受胎告知の天使の言葉に従うこととは、パラレルな出来事であり、同一の事態の、二つの象徴的な表現とも言える。同一の事態が対立するものとして認識されるのは、それが生じるときの自我の発達段階が異なるからである。

心理療法について考える上でこの指摘は示唆に富む。現象としては同じような事態が生じていたとしても、その個人の「自我の発達段階」によってその意味は全く異なるものとなり得る。例えば、一見同じように学校に行かなかったり、引きこもっていたり、家出をしたりしても、その子どもの自我の発達段階によってその意味は異なる。また大人の場合でも、心理療法の展開を見ていくとき、つねにその個人の「自我のありよう」の視点を踏まえて考えるべきである。ここで「自我の発達段階」ではなく、敢えて「自我のありよう」としたのは、「発達」という表現には、線形を辿り、段階的に進んでいくというニュアンスが強く、価値観も含まれるからである。

(3) 心理学的な処女性について

さて、マリアとイヴの話に戻る。マリアもイヴもともに処女であるとされるが、両者におけるその意味は異なる。

「処女で汚れのないイヴ」は、一人の人間として、つまり個としてこの世界にまだ生まれていない。つまりイヴにはまだ自我が誕生していない状態であるともいえよう。これは、元型的な世界に開かれたままの、無意識的なイメージの洪水の中で方向性もないまま漂っている人の状態にたとえられるのではないであろうか。そこには、溺れかけているという悲壮感も恐怖感もない。意識できなければ、それはそれで至福の状態にあるとも言えるのかもしれないが。

他方マリアの場合、イヴ同様元型的世界に開かれながら、胎内では凝固、つまりキリストの受肉が生じている。Edinger (1985)は、欲望が凝固をもたらしつつあることを指摘しているが、個人的な欲望がもたらす凝固は個人レベルのものである。マリアに生じた凝固はこのような個人的なものではない。Edinger (1995)は、『The Mysterium Lectures 結合の神秘註解』の中で月の象徴体系について論じ、①領域間の仲介者としての月、②凝固を促す、という特徴をあげ、「マリアはキリストの受肉をもたらしため月の働きを

してい」るとしている。つまりマリアは、まさしく天上と地上の仲介者として存在し、キリストを凝固、受肉し、創造をもたらしたのである。

Edingerによれば心理学的な処女性とは、「個人的な欲望に汚染されていないという意味で純粋な態度のこと」であり、「処女なる自我は、個人を超えたエネルギーと同一化することなく関係をもてるほど充分意識化された自我である」。それゆえ、結婚し、出産しても心理学的には処女でありうる。

女神を祭った神殿において、癒しを求めて来訪する遠来の旅人と匿名性の出会いをし、聖なる交わりを遂げた女性、聖なる娼婦つまり聖娼が処女であると見なされたのもそのためである。Qualls-Corbett (1988)は、著書『聖娼 The sacred prostitute』の中で、その歴史を辿りながら、性と聖性の統合の示す今日的意義について詳しく論じている。

本稿では「受胎告知」の場面のイメージを広げ、垂直次元に開かれることの意味について述べ、さらに心理療法と関連付けながら考察を行なった。「受胎告知」におけるマリアと楽園追放におけるイヴとを比較し、そこに見られる心理学的な処女性の違いについて、マリアの体験の二重性—神的な側面と人間的な側面、聖なる側面と俗なる側面—について、の Edinger の考えを紹介した。

参考文献

- Edinger, E. F. (1985) : Anatomy of the Psyche—Alchemical Symbolism in Psychotherapy. Open Court Publisher Company. [岸本寛史・山愛美訳 (2004) : 心の解剖学. 錬金術的セラピー原論. 新曜社.]
- Edinger, E. F. (1987) : The Christian Archetype. Inner City Books.
- Edinger, E. F. (1995) : The Mysterium Lectures. A Journey through C. G. Jung's Mysterium Coniunctionis. Inner City Books.
- Qualls-Corbett, N (1988) : The Sacred Prostitute—Eternal Aspect of the Feminine. [菅野信夫・高石恭子(1998) : 聖娼. 永遠なる女性の姿. 日本評論社.]
- 山 愛美(2006) : 『キリスト元型』と心理療法. 人間文化研究 第17号, 213-221.